

西南戦争における郷土従軍の背景に関する考察

A Study of Expedition for Country Samurai in Seinan War

有馬晋作

本稿は、士族の最大で最後の反乱である西南戦争が、なぜ激しくなり長期化したかを、明治初期の鹿児島県（薩摩藩）の他県に比べて士族階級つまり郷土の多さに求め、大規模な郷土従軍の背景を考察するものである。筆者の専門が、行政学・地方自治論であることから、西南戦争当時の地方自治制度に着目する。すなわち、当時、鹿児島県の地方行政機関つまり「大区小区」の区・副区長に、私学校幹部が任命されていたこと、さらに県庁の役人・警察官も私学校派が多かったことから、実質上、当時の鹿児島は一種の軍事政権になっていたという見解を示している。この見解を、西南戦争の推移もまじえながら、これまでの郷土出兵の理由についての先行研究も紹介し、さらに筆者の曾祖父・高江郷土の有馬晋介の従軍日記も例にして、論じるものである。

キーワード：西南戦争、郷土、私学校、大区小区制、軍事政権

目次

- I はじめに
- II 西南戦争時の地方制度の状況
 - 1 薩摩藩の特色ある農村支配制度
 - 2 明治初期の鹿児島県の統治機構
- III 西南戦争の推移—有馬晋介の従軍日記も例に—
 - 1 西南戦争直前の状況と勃発の経緯
 - 2 出発の状況
 - 3 戦争の推移
- IV 郷土従軍の背景
 - 1 郷土従軍の原因
 - 2 高江郷の状況—有馬晋介も例に—
 - 3 郷土従軍の背景—実質上の軍事政権の誕生—
- V おわりに—西南戦争後の鹿児島—

I はじめに

1877（明治10）年に勃発した西南戦争は、士族の最後で最大の反乱で、多くの若者が西郷軍・政府軍に分かれて戦った。本稿は、現在の鹿児島県薩摩川内市高江町（今では九州電力川内原発の地で有名）つまり西南戦争時は高江郷の郷土であった筆者の曾祖父「有馬晋介」（当時満17歳）の西南戦争従軍日記も例にして、西南戦争における郷土従軍の背景を、筆者の見解でもある「軍事政権説」も加え考察するものである。なお、西南戦争に関する研究状況について、猪飼隆明は、「現在（2008年）、西南戦争を含めて士族の反乱は、それほど興味をそそる研究対象でないようであるが、地道に史料が発掘され、翻刻され、研究されてきているのである。とくに、鹿児島では西郷に従って出陣した若い私学校の兵士たちの日記が多く紹介されてきている」（猪飼隆明2008年207頁）と指摘する。本稿も、従軍日記も紹介しながら、郷土従軍に関する新たな見解を示そうという試みである。

ところで、西南戦争を含む士族の反乱については、近年、再評価され始めている。たとえば、猪飼隆明は、1873（明治6）年の征韓論争が生み出したものは、士族反乱と自由民権運動の2つであり、岩倉具視や大久保利通らが国家意志の決定や人事を専制的に掌握する体制すなわち有司専制を打破すべきという意味も持つという。そして、西南戦争を、むしろ有司専制を打破するための戦争と位置付け、西郷のさまざまな主張を読みとると、その理想の国家体制は大日本帝国憲法が示す国家像に近似していると指摘している（猪飼隆明2008年98,203頁）。

今年（2018年）は明治維新150年で、NHKの大河ドラマも「西郷どん」（せごどん）のタイトルで西郷隆盛が主人公である。そのためかマスメディアでも明治維新をはじめ西南戦争を取り上げた記事が見られ始め、その中で先ほどの指摘と同様のものがみられる。たとえば、西南戦争の歴史的な位置づけを「不平士族による反動と捉えがちだが、大久保利通らの独裁（有司専制）への批判という点で通底しており、近年は自由民権運動に道を開くものとして再評価されている」（読売新聞2017年3月7日）との指摘がある。本稿では、このように再評価されつつある西南戦争について、戦争が長引き激しくなった要因といえる多くの郷土出兵を糸口に、その背景を考察する。

II 西南戦争時の地方制度の状況

1 薩摩藩の特色ある農村支配制度

まず、西南戦争において西郷軍の兵力が高かった理由といえる薩摩藩の武士の数が他藩に比べて多かったことを、その特色ある農村支配制度からみてみたい。江戸時代の諸藩では、武士つまり士族階級は全人口の5～6%であったが、薩摩藩は26%（明治4年、鹿児島禄高調）にも及んだ。

士族が多くなったのは後述する外城制度を採用したからであるが、その採用理由は、2つあるとされる。

まず、対外的に中央政権との対決に備えること、すなわち関ヶ原敗北後の不安に伴う外城制度の採用、そして対内的には農民統治対策、特に一向一揆などの一揆対策とされる。ちなみに、前者の理由に関しては、豊臣秀吉の九州平定直前の一時期、島津が九州大半を支配していた頃、多くの武士を召し抱えていたのも理由である¹。

ここで、外城制度と郷土についてみてみたい。外城制度とは、110あまりの外城すなわち郷という行政区画に分けて外城衆中（しゅうじゅう）と呼ばれる武士（のちに郷土に改称）を配置し地方行政と防衛の任に当たさせた制度である。中世の地頭・衆中制つまり有事の際には地頭が外城衆中を率いて闘うという中世の流れをくんだもので、1つの郷は数か村からなり、中心となる村に武士集落の「麓」があった²。

この外城制度について、『広辞苑』（第6版）では、「戦国期から江戸時代にかけて、大名島津氏が設けた在地支配のしくみ。各外城は家中の外城主・地頭の支配下に置かれ、外城衆（のちに郷土に改称）が配属された。外城衆は外城の麓（ふもと）部落に居住し、農耕を営んで自活し、地方の役人として農民を支配した」と端的に説明している。すなわち、鹿児島に島津氏の居城を内城としたのに対し、領内各地の城を防衛線として外城を称したもので地方行政の単位とされ、1744（延享元）年に私領の今和泉（揖宿郡）を定めて以後、113か所で一定している。外城には地頭所（藩直轄地）と私領地（上級家臣の知行地）があり前者が92か所、後者が21か所であった³。

諸郷の政治は形式的に地頭が任命されたが、赴任する者はなく、現地では郷土の中から選ばれた暖（あつかい）すなわち郷土年寄（としより）、与頭（くみがしら）、横目（よこめ）の三役が分担して政務をみていた。そして、薩摩の郷土は他藩と違い藩籍を持つ武士で、郷土は城下士と同じように知行地を持っており、その知行地を自分で耕し手に余るところだけ小作人に任せていた。つまり、郷土は藩士であると同時に、自作農であり在地地主であった。これは自分では耕さず知行地の年貢を徴収するだけの城下の藩士（城下士）とは大きな違いだった⁴。

2 明治初期の鹿児島県の統治機構

実は、西南戦争直前から、鹿児島の地方行政は私学校派が牛耳っていた。ここでは、その経緯を詳しくみてみたい。

新政府の統治機構は、維新直後に、内閣制度に似た太政官制を設置し、地方制度として、1869（明治2）年に版籍奉還、1871（明治4）年に廃藩置県を行う。つまり、藩を府県に改め、府県を地方行政機関として位置付け、東京、京都、大阪の3府に官選の知事を、県に同じく官選の県令（後に「知事」に改称）をおいた。これは、現在のような府県の国の総合出先機関化の由来とされる⁵。

明治が始まった頃の鹿児島の状況をみたい。戊辰戦争に出軍した薩摩藩の総兵数は、銃隊42

小隊、砲隊6隊、軍艦2隻で、戦兵約4500、総数6000余人であり、彼らは1868（明治元）年末までに東北転戦から帰郷していた。戊辰戦争で兵士として出陣したのは、ほとんどが城下士で小姓与出身の家格の低い者たちだった。ちなみに郷士も小姓与格の家禄であったが、城下士は郷士を蔑視していた。門閥派は保守的で公武合体論にとどまり、出兵に際し消極的であったのに対し、下級士族は急進派で倒幕論者が多かった。そのため、凱旋兵士の政治的発言力が増し、戊辰戦争後の薩摩藩は、門閥家老が握っていた藩政への弊風を打破し全面的な改革を求めた。下級士族による藩政参加が実現し、1869（明治2）年2月の版籍奉還を契機に門閥家老が藩政から追われ、戊辰戦争に活躍した者が藩政を担うという下級士族の全面的な藩政掌握が実現する。それに伴う改革として、上級士族の地位引き下げと下級士族の待遇向上のための家格の廃止と録制の改定がなされた⁶。

廃藩置県に備えて、1871（明治4）年4月に城下5大隊と2砲隊が御親兵として上京すると、城下の警備には諸郷の常備兵を招集してあたらせることになる。戊辰戦争の際、諸郷隊は急編成のためあって、特に北越の戦鬪で資質が城下士族に劣っていることが分かる。そのため、外城常備隊の編成が兵制改革の重要な課題となっていた。すでに1869（明治2）年の兵制改革によって、従来の郷士年寄、与頭、横目の三役を廃し、かわりに常備隊の小隊長・半隊長・分隊長をおき、「軍政」のもとに諸郷の振興を図ることにしていた〔原口泉他2015年18頁〕。なお、ここに本稿が注目する「軍政」の言葉が出ているのは興味深い。

そして、1871（明治4）年7月、廃藩置県が達せられると、知政所は鹿児島県庁と改められ、旧藩兵の解体にも着手した。戊辰戦争に参加した士族の多くは、先ほどの常備隊に編入されていたが、解隊後は後述の地方行政のための戸長役場の役人や郷校の教師となった者もみられ、その多くは秩禄処分によって収入を失った。私学校設置後は同校に入校し、西南戦争に従軍した者が多かったと考えられる⁷。

一方、1871（明治4）年4月には、明治政府は、戸籍法実施のため全国の村いわゆる自然村をベースに新たに区を設置し、それまでの庄屋・名主・年寄り等の村役人に替えて、戸籍吏として国の役人である戸長・副戸長をおいた。さらに翌72（明治5）年に「大区小区制」を定める。これは、区を大区に改めて国の役人である区長をおき、旧村つまり複数の自然村単位で小区をおいて戸長をおいた。このとき、従来の村役人を区長・戸長とすることもあった。そして、その業務は戸籍事務以外の徴税や徴兵など行政的業務も担うことになった⁸。

鹿児島県でも日向・大島郡・川辺郡十島を除いて大区88、小区537で、大区には城下以外は1郷をこれにあて、小区は1村か2村をあて、ときに1村を2小区に分けた。たとえば、始良郡の溝辺郷は5村を5小区、川辺郡の川辺郷は13村を5小区にした。このように鹿児島県の場合は、まず郷ありきで、郷単位で大区となった。他県たとえば宮崎県では、旧村すなわち自然村が小区で、それを3つほど集めて大区を設置した⁹。

すなわち他県と比較すれば、他県では大区は人工的な設置だったのに対し、鹿児島県では大区

は江戸時代の郷と同じエリアであったため、大区制は円滑に受け入れられたといえる。たとえば、有馬晋介のいた高江郷は高江村、久見埜村、寄田村の3村で構成され、そのまま高江郷が大区となった¹⁰。また、他県では農民の庄屋が鹿児島では郷土の郷土年寄であり、郷土が地主化したこともあって、江戸時代の農村支配制度が、大区小区制度導入後もそのまま引き継がれた感じがしたといえよう。

そして、ときの大山綱良県令は、士族の土地所有への意欲が強いことから地租改正への士族の反対を押さえるため、私学校の幹部を大区の区長・副区長に採用することとする。最初は、1875（明治8）年、大山県令が西郷に地租改正の順調な進展を期すために、市来郷や祁答院郷の正副区長の人選を依頼したことに始まるようである。冒頭で述べたように、1876（明治9）年頃の鹿児島県政は、正副区長に私学校幹部が任命されて、私学校派で牛耳られる状態であり、芳即正によると私学校は学校というより「政治集団」と性格を変質させていたという〔猪飼隆明 2008年 26,28頁〕。なお、有馬晋介の高江郷には前官職が海軍中尉の山下喜衛が副区長に任じられた¹¹。

III 西南戦争の推移—有馬晋介の従軍日記も例に一

1 西南戦争直前の状況と勃発の経緯

西南戦争の前に、いくつかの士族の反乱はおきていた。熱烈な神道信仰者のグループが武士意識が非常に強く廃刀令に憤慨して、1876（明治9）年に熊本で「神風連の乱」をおこし、県令の屋敷や熊本鎮台の司令長官の屋敷を襲い連隊も襲撃したが、その後すぐ襲撃者が名乗り出て事件自体はすぐ片付いている。そして同年の山口県の前原一誠の「萩の乱」がある。前原は維新のとき長州藩の有力メンバーで戊辰戦争でも功績があり、他県の県令にもなったが新政府に不満があり国に帰っていたとき起こした乱で政府軍に鎮圧されている。このように秩禄処分による禄の召し上げ、それから廃刀令によって、士族の不満は大きかった。さらに、その頃、景気も悪かったし豊作であっても米の値段が下がっていた。そこで、各地で大きな農民一揆がおこる。政府にとっては、士族が何をするか分からないのに加え、農民まで一揆をおこすということで、明治政府は大きな危機に直面していた¹²。

前後するが1873（明治6）年10月、征韓論で敗れた西郷隆盛が帰郷すると、桐野利秋、篠原国幹、別府晋介らをはじめとする軍人や文官たちは、西郷下野に従って辞官帰郷する者があいついだ。私学校の建設は、将来の一大事に備え毎月数回集まる場所がほしい、将来のために学校を作って教育をしたいという要望があって西郷が了承したものだった。1874（明治7）年6月に鹿児島城廓（うまや）跡に「私学校」を設立する。学校といっても銃隊学校と砲隊学校からなり、その内容は士族向けの兵学校だった。さらに私学校の分校が旧城下をはじめ、各郷に設けられ136か所にもおよんだという。この結果、多くの郷土が私学校徒になったし、警察にも私学校派が多かつ

たという。西南戦争は、この私学校が主導勢力となって起こされた¹³。

ちなみに、私学校という名称は、もともと銃隊学校、砲隊学校についてそう呼ばれていたのではなく、城下や各郷に分校が設立され、その分校が1872（明治5）年の学制によって設立された公立の小学校（郷校や藩校が再編された）を、午後あるいは夜間に使用したことから、公立に対して私学校と呼ばれるようになったという¹⁴。

前述の神風連の乱、萩の乱のときも西郷隆盛が動きをみせなかったことから、鹿児島では土族はしばらく沈静化の動きをみせていた。このようななか1877（明治10）年1月下旬、政府側が鹿児島島の反政府的な動きを心配して、鹿児島島の草牟田の弾薬庫から弾薬等を深夜ひそかに搬出したことから、一部の私学校徒が弾薬庫を襲撃して弾薬等を奪取する事件が起きる。ついで2月初め、墓参の名目で帰郷していた中原尚雄以下警視庁関係者らが逮捕され、西郷隆盛の暗殺計画が自供される。一気に、土族の動きはあわただしさをみせはじめた。2月6日、急を聞いて遊獵中の根占から帰った西郷は、私学校幹部が提案した、西郷暗殺を政府に尋問するために西郷を陸軍大将として率兵上京することを承認することになる¹⁵。

2 出発の状況

前述したように薩摩は土族が多いとされていたが、それは西南戦争でも示された。最初に1万3000人ほどの若者が7大隊に組織され出発する（表1参照）。この数は相当な数で、1大隊2000人ほどで、7大隊の最後の2つの大隊は地方の若者を、そのままその土地で編成したものであった¹⁶。

表1 西郷軍の出発時の編成と大隊長

1 番大隊	篠原国幹	陸軍少将
2 番大隊	村田新八	宮内大丞
3 番大隊	永山弥一郎	開拓使屯田兵事務局（中佐）
4 番大隊	桐野利秋	陸軍少将 元熊本鎮台司令長官 陸軍裁判所長
5 番大隊	池上四郎	元近衛少佐 外務省十等出仕
6 番・7 番連合大隊	別府晋介	近衛陸軍少佐
6 番大隊	越山休蔵	
7 番大隊	児玉強之助	

（出所）猪飼隆明2008年32頁。

この編成を詳しくみたい。西郷軍全体の編成は、1877（明治10）年2月13日に行われた。鹿児島城・私学校前の練兵場に、城下はもちろん各郷からぞくぞくと郷士がつめかけた。ここに集まった兵士は、およそ1万3000名、うち城下士は1600余名で、その他はみな郷士であった。同じ郷の出身者が同じ隊にまとまって配属することは避けられ、1番大隊から7番大隊に振り分けられた。1個大隊は約2000名で構成され、それを兵員200名の小隊10個に編成した。ただし、6番・7番大隊は、1500名と小さく、小隊も80名程度とした。各大隊の大隊長と、もと政府内の地位を示すと表1のようになる。この隊長の下に、小隊長・半隊長・分隊長がおかれ、それぞれに砲隊が配属された。この砲隊は山砲28門、野砲2門、臼砲30門を持ち、戦闘態勢になる前は2個隊に分けられた¹⁷。

ここで有馬晋介の状況を見てみたい。「明治十年・出軍日記・有馬晋介」〔『川内市史料集9・川内と西南の役』1～12頁〕によると、1859（安政6）年7月15日生まれ、満17歳（数えて19歳）だった有馬晋介は、1877（明治10）年2月13日（旧10年正月元旦、雪）、「本日ハ前一時港町ヲ立テ同十時此ニ鹿児島ニ着ス、直ニ練兵場エ出ツ、然ルニ隊編ニ依テハ村中同志モ悉皆分散トナル、生輩ノ隊ハ四大隊六番小隊ニ加入」となっている。つまり晋介は、桐野利秋率いる4番大隊6番小隊に編入されている。晋介所属の4番大隊6番小隊長は城下士の松下助四郎であった¹⁸。なお、晋介の日記の文章中に「村中同志モ悉皆分散トナル」と記述しているように、同じ郷の出身者が同じ小隊に配属することは避けられたのは、城下士の郷士への蔑視が郷士の反発を招き指揮命令に影響を及ぼすのを恐れ、郷士を分散して編成したものと考えられる。

これらの大隊が、2月15日に鹿児島を熊本に向け出発した。なお、大隊を幾つかに分けての出発だったが、大きくみると、西の方の阿久根・出水・米ノ津・水俣といったところを経て米ノ津あたりから船に乗って熊本に行くルート、もう1つは鹿児島からずっと北の方に上って、横川とか加久藤とかを経て人吉に行き球磨川を下って熊本の方に行くルートだった。西郷は、このルートをたどった¹⁹。

晋介のルートは、従軍日記によると、2月16日、「本日ハ練兵場江集合勢ヲ揃、戊辰役ニ戦死ヲ成シタル照魂社ニ参拜シ、三大隊西目、四大隊ハ東目ニ繰出ス、磯ヲ経テ重富町昼食シ加治木ニ着シ、同所ニ一泊ス」と書いており、加治木のあとは横川1泊、大口1泊し、熊本県水俣1泊、田之浦1泊、そして熊本城へ向かっている。

3 戦争の推移

結果的にみると、西南戦争は熊本城を落とせなかったのが西郷軍の敗因といえる。ここでは、西南戦争の推移を有馬晋介の状況も視野に入れて短くみてみたい。

政府軍をみると、当時、熊本鎮台の司令官は、土佐出身で戊辰戦争でも功労があった谷千城で、熊本城で籠城する作戦であった。結果的にはこの作戦は成功する。その理由のひとつに、加藤清正が築城した熊本城がしっかりした城であったことがあげられる。西郷軍は城を包囲して一気に

攻めれば落ちると思っていたが、いっこうに落ちず、結局、城は落ちなかった。攻める方にも守る方にも大きな損害が出た。そこで西郷軍は、一部はそのまま城を包囲し、一部はさらに北の方に攻め上がっていく。それに、そのほかの隊も合流する。このとき政府軍は、小倉の連隊の連隊長をしていた乃木希典少佐が軍隊を率いて小倉から福岡を經由して救援にかけつけていて、熊本の北寄りの一角で激突することになる。これが2月20日過ぎのことである。その後、田原坂で約1か月にわたって激しい戦闘が行われる。一方、政府軍は、長崎の方から船で軍隊を八代まで運んで熊本の南側から上陸して攻めるという作戦を取り、これが成功する。さらに政府軍は、精鋭部隊が出払っていた鹿児島を鹿児島湾から3月7日に上陸して占領に成功した。結局、田原坂の激戦で西郷軍が敗れ、熊本城の包囲が解け内側と外側の連絡がついたのが4月15日で、その後、西郷軍は敗走することになる²⁰。

有馬晋介は、この激戦の田原坂の戦いに、3月14・15日、応援として参戦している。従軍日記によると、「三月十四日半天旧正月三十日、本日前九時ニ田野ヲ立テ田原出張ス、后一時ヨリ防戦ス、此田原ハ殊ニ名高キ連日大戦ニ兩軍ノ死骸山ヲ成シ且往来ノ如ハ毎日夜死傷ノ人ヲ送行故ニ赤血道路ヲ満ツ」、「三月十五日晴天旧二月朔日、今日前十時此迄田原ニテ防戦シ夫レヨリ引揚テ辺田野ニ至リ後九時ヨリ十二時迄木留本営ニ番兵ス」と記述している。「赤血道路ニ満ツ」と述べているように、戦闘の激しさを物語っている。この3月14日は、政府軍が有名な警視隊による抜刀隊を投入した日であり、開戦以来の激戦とされる²¹。

晋介は、2月22日から4月14日まで田原坂を中心に山鹿～植木・木留～白浜付近の戦闘に参加し、「田原坂敗戦後、薩軍が木山、矢部方面に撤退中、4月20日、御橋町辺田見で負傷し、病院を矢部・人吉・小林と転じ故郷に帰っている。」〔『川内市史料集9・川内と西南之役』「有馬晋介従軍要図」11頁、「解題」〕。

負傷した4月20日について、従軍日記では、「四月廿日晴天旧三月七日、今日辺田見ノ寺中ニ於テ在陣セシニ番兵先ヨリ報知セリ、岡ニ上リ見レハ前方甲佐ニ方リテ大砲聞ルト、敵兵我前面ニ進来リ砲戦ノ蘭ナリシニ、ハカナクモ敵丸ニ打貫レシコトハ全ク夢ニモ不知、五組渡辺佐兵衛トノ等ノ援助ニヨリ漸ク矢部路ニ送ラレタリ」となっている。なお、負傷した晋介は有馬家唯一の男子なのでなんとしても助けようと高江郷士らが協力して病院へ運びまた転送され、やっと故郷高江に戻ったという逸話が伝わっている²²。

筆者の父、有馬森男（2015年2月他界、享年91歳）によると、実家（鹿児島県薩摩川内市高江町）の有馬晋介の写真には、顔に弾丸の傷跡があったという。ちなみに父他界の際に、戸籍をさかのぼり入手し確認したところ、有馬晋介は西南戦争のあった年の翌々年の明治13年9月、すなわち満20歳に「知加」と入籍しており「知加」の父は、「渡辺佐兵衛の長女」と戸籍に記載があった。すなわち、有馬晋介は西南戦争で負傷したとき助けてくれた渡辺佐兵衛つまり命の恩人の娘と結婚したということであり、筆者にとって晋介の結婚は物語性を感じる発見であった。

熊本で負けた西郷軍は、山の中の椎葉を抜け人吉へ出て、人吉で一時期布陣したのち鹿児島が

政府軍に占領されているため、宮崎の方に入っていくことになる。小林・宮崎・佐土原と移っていき、政府軍がそれを追って宮崎が戦場となる。西郷軍は、宮崎を北の方に移動するが、一方では政府軍が大分県から攻めてくる。最終的には、宮崎北部の延岡で実質最後の戦いをし、可愛岳(かのだけ)から山へ登って一番険しい九州の背骨に当たるような山脈を南に下って鹿児島に帰ってくるというコースをとる。鹿児島に着いた時は兵士の数も減っており、どうにもならなくなって、城山の一角に閉じこもり明治 10 年 9 月 24 日、総攻撃を受けて壊滅する。西郷以下、幹部はそのときに戦死または自刃し、西南戦争は終わる。西南戦争は 2 月に始まって 9 月に終わるが、それまでの土族の反乱と違い長期といえる 7 か月余りの内戦が終わり、これ以降武力による反乱は止み、全国的な統一が可能となった²³。

IV 郷土従軍の背景

1 郷土従軍の原因

(1) 郷土従軍の必要性

西南戦争後の状況を見ると、鹿児島県の城下士は没落したが、郷土は地主化して明治・大正の鹿児島の地方政治を牛耳ることになった。たとえば芳即正は、「西南戦争の惨禍で直撃されたのは主に鹿児島城下土族で、手作（てづくり）地を持ち、かつ地主的生活を続け得た県下諸郷の麓土族は、太平戦争後の農地改革で農地解放を強制されるまで、鹿児島の政治・経済・社会・教育などのあらゆる分野に君臨しつづけリーダーシップを握った」〔芳即正 1987 年 11 頁〕と指摘している。有馬晋介をみても、高江村長を明治 25～29 年、明治 32～大正元年と 2 回務めている²⁴。

すなわち、結果的にみれば、西南戦争に参加する必要性が、郷土は城下士に比べ低かったともいえる。この点について、すでに歴史上、明確に主張している者がいる。それは、政府側の川路利良（大警視、郷土出身）である。つまり、西南戦争直前、鹿児島へ内偵に出された中原尚雄へ川路が与えた全 35 条の訓諭太要の中に、「たとえ反乱を起こしても日本全国の兵隊を相手にすれば鹿児島に全然勝ち目はないこと」を鹿児島の土族に説く一方、特に外城土族に対しては「これまで城下の土族からバカにされてきたのに、この上騒動に加わって賊名をこうむり、城下土族のために犬死にしないよう」説得するよう、鹿児島での任務が明示されていた〔南日本新聞編 1968 年 155 頁〕。つまり、西南戦争は状況がよく分からない城下土族がおこす戦争で郷土が従軍する必要はないという認識である。

実際、西南戦争に否定的な郷土もみられた。たとえば、出水の伊藤家などである（以下、原口泉他 2015 年 46,47 頁）²⁵。

出水の伊藤祐徳つまり伊藤家は、出水郷で代々郷の行政・司法・軍事をつかさどる暖（あつかい）すなわち郷土人寄の役をしてきた上級郷土である。家禄は 100 石であった。祐徳は幕末に 108 人

の出水郷兵士を率いて、動乱の京都に出軍して御所を警固した。鳥羽・伏見の戦いに参加し、まもなく若き西園寺公望の山陰鎮撫総督の護衛、とくに参謀として丹波・丹後・鳥取・但馬にも出軍した。西南戦争では、祐徳も西郷軍の大小荷駄方として従軍する。人吉では弾薬・食料などの補給を担当し、6月には出水隊600人の総指揮官として郷土出水の防衛にあたった。しかし、なぜか戦いのなかばで政府軍に降伏している。伊藤の降伏を西郷軍に対する叛旗（はんき）または裏切りとみなすこともあるが、伊藤は初め西郷軍に従軍することに積極的ではなかったという。西郷より年長の52歳で、従軍に消極的な伊藤に対し、挙兵の直前、区長山口孝右衛門をはじめとする出水の私学校徒たちは、刀を抜いて従軍を迫ったという。出水麓にある伊藤家の奥座敷には、柱や鴨居に刀傷の跡が残っており、そのときのもものと伝えられる。伊藤家は、5代にわたって出水郷の干拓地開墾に携わり、祐徳も安政7年（1860年）出水郷庄瀧の浜干拓工事の監督を命じられ、5年後の文久4年（1864年）に250ヘクタールの広大な干拓に成功している。祐徳は武人である一方、有能な土木事業家でもあった。明治10（1877）年6月、政府軍の出水総攻撃を受けて、勇敢を誇った出水軍団は敗れ、宮之城へ退き、まもなく降伏する。伊藤祐徳は、降伏で郷土出水の被害を最小限にとどめようとしたと推察される。

（2）郷土従軍に関する先行研究

では、結果的に出兵の必要性が城下士に比べ低かった郷土が、なぜ多く従軍することになったのだろうか。この点は本稿のテーマであるので、まずここでは出兵理由の先行研究をみてみたい。

まず、私学校の幹部、桐野利秋らが政府をたびたび批判していたので、当然、私学校徒すなわち郷土も反政府の姿勢になっていたという見解である〔原口泉他2015年173頁〕。

次に、地租改正に対する不満があったという見解である。すなわち、1876（明治9）年、政府の指令によって郷土が開発した浮免（うきめん）・泡地（かけち）だけが士族所有地で、給地は耕作農民の所有となったこと、さらに認められた土地について租税が高いことである。これに対する強い不満が郷土にあったという〔原口泉他1999年277頁。南日本新聞編1968年249頁〕。

以上は、新政府への不満を原因とした出兵である。そのほか、次のような見解がある。

猪飼隆明は、私学校に所属すること自体に優越感があったことのほか、私学校幹部が区・副区長に任命され鹿児島県下は県庁の役人・警察官も含め私学校派で牛耳られて私学校が「政治集団」（芳即正がすでに指摘）へと性格を変質していたことが原因としている〔猪飼隆明2008年26,28頁〕。後者は、私学校派の影響力が地方に及び、地方に在住していた郷土が従軍せざるを得なかったというようにも理解できる。それと、私学校はいったん入校すると容易にやめることはできない状況であった²⁶。

佐々木克は、血気にはやる士族が多数をしめていたのだろうが、中には、懐疑的な人間や楽観的な人間も混在させながら、西郷軍は熊本鎮台・政府軍攻撃へと一直線に突き進んでいったとする。そして、諸郷の郷土の場合、率先参加というより区長や戸長の行政的命令に応じたケースが

多いという見解である〔佐々木克 1991 年：落合弘樹 2013 年 149 頁〕。

さらに、「鹿児島征討録」によると、出兵に際して薩軍は 20 歳から 40 歳までの壮年を従軍資格としていたが、兵の消耗が激しくなるにつれ対象が 15 歳から 45 歳に伸ばされ、のち 13 歳から 50 歳まで拡大されたという。これは完全な「徴兵」であった。補充兵の出陣を「二番立ち」と称したが、城下の士族はほとんど出尽くしているため補充対象はもっぱら外城の郷土となった。したがって、隊の編成も次第に郷土兵が増え、指揮官 1 人を除いて郷土という隊もあったという（南日本新聞編 1968 年 205 頁）。つまり、「二番立ち」以降は、強制的な出兵だったということである。

ところで、藤井行徳・小原健は、次のような総合的かつ詳細な理由をあげている。私学校徒は強制的に入校させられたか否かは別にしても積極的に出兵したといえるという。それは、田原坂での多くの戦死者を出した勇猛果敢な戦闘からみえる高い戦意が示している。ただ、私学校は漢学と武術の鍛錬が中心で知識・情報といったものが一切なく、もともと西南戦争に批判になる可能性は全くなかった。これは、戊辰戦争で上京や他県（他藩）に行軍した経験のある郷土、たとえば出水郷土が西南戦争に批判的だったことから分かるという。私学校徒以外でない一般の郷土達（いわゆる「二番立ち」以降の出兵者）は半ば強制され無理やり出兵した人たちが大半で戦意も低く装備も良くなかったという。彼ら貧しい下級郷土の出兵理由は、狭い郷中での人間関係、西郷に対する畏敬の念、長年培われてきた士風などと考えるのが妥当としている。薩摩士風を現す言葉に「議を言うな」という言葉がある。これは上から言われたことは素直に従い即実行すればいいという考え方で、批判しようものならば腰抜けと罵倒される。

これらをまとめると、郷土出兵には多様な要因がからみあっているが、私学校徒かそうでないか、上級郷土か下級郷土か、戊辰戦争に出兵したかしないか、さらに区長または副区長が私学校派かそうでないか、薩摩藩領から外へ出たことあるかないか、多様な知識情報を持っているかどうかの数々の要因が影響し、出兵に対して積極的か消極的かに分けられるとしている。それは、表 2 のようになり、郷ごとに割り切って考えることはできないという〔藤井行徳・小原健 1993 年 37,38 頁〕。

以上の先行研究をみると、新政府に対する不満をベースにしなが、様々な要因が組み合わさって郷土の従軍理由ができあがっているといえよう。

表2 郷士の出兵意欲の温度差の要因

積極派	消極派
<ul style="list-style-type: none"> ・私学校徒である。 ・上級郷士である。 ・戊辰戦争に出軍していない。 ・区長または副区長が私学校派である。 ・薩摩藩領から外へ出たことがない。 ・色々な知識や情報を持っていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・私学校徒でない。 ・下級郷士である。 ・戊辰戦争に出軍した。 ・区長または副区長が私学校派ではない。 ・薩摩藩領から外へ出たことがある。 ・色々な知識や情報を持っている。

(出所) 藤井徳行・小原健1993年38頁。

2 高江郷の状況—有馬晋介も例に—

郷士出兵の理由について前述の先行研究をみると、郷士一人ひとり、その理由は様々といえるが、その中でも何が大きかったかということ、高江郷及び有馬晋介の状況から、あらためて考えてみたい。

『川内市史料集 9・川内と西南之役』(13～16頁)によると、高江郷からの従軍者は103名で、うち戦死者は19名となっている。103名の中には、戦況が悪くなり、いわゆる「徴兵」によって主に郷土防衛に当たった者も含まれている。従軍者の内訳を詳しくみると、高江郷からは「一番立ち」63名(私学校徒)で14名戦死、「二番立ち」は34名で2名戦死、「三番立ち」は6名で1名戦死となっている。史料では「一番立ち」は私学校徒で、そのほかは郷士となっている。

有馬晋介は、満17歳(数え19歳)の若さで出兵しており、私学校徒の一番立ちで田原坂でも戦うなど戦意は高かったと推測される。また前述のように、高江郷の副区長は私学校幹部の山下喜衛(前海軍中尉)であった。晋介が、どこまで当時の内外の状況を理解していたかは分からないが(高江郷士は戊辰戦争には一部参戦:『川内市史』下巻4頁)、前掲表2の積極派の全ての要因を満たしていたと考えられる。すなわち、私学校徒・上級郷士であり、戊辰戦争に従軍しておらず、副区長が私学校派で、(数え19歳なので)薩摩藩領から出でず色々な知識や情報を持っていない。このことから、晋介は従軍積極派であって高い戦意を持っていたと推測できる。ほかの一番立ちの高江郷士も同じような状況であると考えられるが、二番立ち以降は、だいぶ事情が違ふと推測される。この二番・三番立ちは、高江郷出兵者計103名のうちの40名つまり39%をしめる。

ここで、前述の先行研究も参考に、高江郷も含め郷士全体の基本的・根本的な出兵理由を考えてみたい。若き郷士が私学校徒になっていたため志願兵も多かったが、最終的には強制的な徴兵も多く行われ、2万3千人(後掲表3の「私学校党」と「徴募兵」)の出兵となった。このような大規模な郷士従軍となったのは、区長・副区長に私学校派幹部が任命され地方行政機関が西郷軍の上意下達機関になっていたこと、それに薩摩土風の「議を言うな」(上から言われたことは素

直に従い即実行という考え方）という郷土の意識が相まって、出兵は当然という雰囲気・状況になったことが基本的・根本的な要因と考えられる。

3 郷土従軍の背景—実質上の軍事政権の誕生—

この多くの郷土の出兵によって、西郷軍の兵力は著しく高かったといえる。ちなみに西郷軍の最終的な出兵すなわち兵力は次（表3）のとおりで、全体で約3万人余にも及んだ。表3のうちの徴募兵とは、前述したように戦争の進展に伴い、薩摩・大隅・日向の三州各地で募集した補充兵で農民兵もいる。当然のことながら高鍋・延岡・飫肥・佐土原の各隊は日向の旧藩が中心となって結成されたものである。このように西郷軍は約3万人が戦い、6000人を超える戦死者を出した。一方、政府軍は約6万人が従軍し16000人が戦病死している²⁷。

表3 西郷軍の最終出兵状況

私学校党（主力戦闘部隊）	13000人
徴募兵	10000人
高鍋隊	1120人
延岡隊	1000人
飫肥隊	800人
佐土原隊	400人
熊本隊・協同隊・竜口隊	2500人
報国隊（竹田隊）	1000人
人吉隊	150人
中津隊	150人

（注）私学校党（主力戦闘部隊）13000人のうち、城下士はたった1600余人で、そのほかは郷土であった〔猪飼隆明2008年31頁〕。

（出所）佐々木克1991年7頁。

このうち注目されるのは、郷土の多さと農民兵も含む「徴募兵」1万人である。また、永井哲雄は、日向における士族の動員、農民兵の動員、資金調達などいずれをみても、鹿児島県宮崎支庁およびその官員、あるいはその下部統治組織である区長・戸長が関係しないものはなく、結局、西郷軍は鹿児島県に合併された日向の統治組織を最大限に利用したと指摘している〔永井哲雄1977年9頁〕²⁸。

このような大規模な出兵が実現した根本的な原因として、筆者は西南戦争直前から鹿児島県下が実質上の私学校という軍隊組織による軍事政権だったことをあげたい。つまり、前述したよう

に芳即正は「政治集団」（前述の先行研究参照）という表現を用いているが、本稿では、一種の「軍事政権」になっていたと理解したい。なお「軍事政権」とは「軍人が中心となってつくっている政権」（『精選版・日本国語大辞典・第1巻』小学館2006年）である。

すなわち、私学校は軍隊組織であり、私学校派が県庁や警察まで占め、その上に幹部が地方の大区・小区の幹部に就任していた。区は地方行政機関であるので、私学校という軍隊が県下の行政機関を掌握し、大規模な兵士の動員を実現したということである。ただ厳密に言えば、1871（明治4）年10月から大山県令の下、県の行政は行われているので、県行政が、大山県令のルートと私学校のルートと二重にあったという意味で二重政権というのが正確であろう。しかし、前述のように私学校派が県庁や警察まで占め、県令大山は私学校の動きを黙認していた。つまり、実質上の軍事政権になっていたといえよう。

V おわりに一西南戦争後の鹿児島一

西南戦争後の松方デフレにより、鹿児島でも郷士の地主化が進み、一方、当時の制限選挙も影響して、郷士による県議会、市町村議会への進出が進み、町村長も誕生する。この結果、明治時代の鹿児島においては、郷士による地方政治支配が実現する。ちなみに、1889（明治22）年の「市制・町村制」の施行も、鹿児島県の町村は郷単位で設置されて、その戸数つまり規模は当時の中央政府が示した基準より大きかった。すなわち、大きな規模で町村が設置されたため、なかには加治木町（旧加治木郷）、蒲生町（旧蒲生郷）などのように、2000年の平成の大合併まで、旧郷の単位で自治体だった例もあるぐらいである。ちなみに、有馬晋介の高江郷は、昭和の大合併（1955年頃）において川内市に高江町が吸収されている。

なお本稿で紹介した有馬晋介は、高江村長在任時は林業振興に尽力している。また、3人の子がおり、長男「一」（はじめ）は高江で家業を継ぎ製材業もやっており、長女「いま」は小学校教員となり、その後、児玉家に嫁いでいる。次男「純彦」は、陸軍士官学校を卒業（陸士24期：明治45年卒）し都城の第23連隊長も務め1944（昭和19）年にサイパンにて54歳にて戦死している。階級は少将であった²⁹。次男の経歴は、武の国「薩摩」を想起するものである。

このように、鹿児島の明治・大正時代は、地主化した郷士による地方政治の支配が長く続いたが、全国より大幅に遅れ、1920（大正9）年に加治木町の小作人100人余の地主への小作料減免要求を皮切りに、県下でも小作争議が起きようになる。そして、1925（大正14）年の普通選挙実施によって、鹿児島県でも半数以上の村議は小作人の代表となり、郷士による地方政治の支配に大きな陰りが生じる³⁰。

以上の明治・大正における鹿児島の地方政治・地方自治の状況については、有馬晋介の村長時代の状況も含め筆者の今後の研究テーマとしたい。

注

- ¹ 武士の多い2つの理由は芳即正の説〔中村明蔵2000年75～78頁〕。また多くの武士を抱えたというのは、一国一城を主張する幕府の調べに対する薩摩藩側の外城制度設置のときの回答とされる〔原口泉他1999年192頁〕。
- ² 原口泉他1999年192,194頁。
- ³ 中村明蔵2000年79,81,82頁。
- ⁴ 原口泉他2015年18,52頁。ちなみに筆者の曾祖父の高江郷の有馬家であるが、麓地区であるが川内川に面した年貢の集積地である「勘場」（かんば）という地に居住していたため勘定方的な役目を長年担っていたという見解もある（高江町郷土史家の家村比呂志氏による説・2016年3月高江町調査時の聞き取り調査より）。
- ⁵ 橋本行史2010年9,10頁。
- ⁶ 原口泉他2015年14～16頁。
- ⁷ 原口泉他2015年18,19頁。
- ⁸ 大島美津子1977年37～40頁。
- ⁹ 芳即正1987年45,46頁。宮崎県については徳永孝一2003年44頁参照。
- ¹⁰ 『川内市史』下巻72頁参照。
- ¹¹ 原口泉他2015年40頁。
- ¹² 中村隆英2015年183～188頁。
- ¹³ 原口泉他2015年38,39頁、中村明蔵2000年141頁、猪飼隆明2008年28頁。
- ¹⁴ 中村明蔵2000年141頁、猪飼隆明2008年25頁。
- ¹⁵ 原口泉他2015年41頁。落合弘樹2013年138頁参照。
- ¹⁶ 中村隆英2015年197頁。
- ¹⁷ 猪飼隆明2008年31,32頁。
- ¹⁸ 晋介所属の小隊長は、矢野宏治2011年（210頁）で確認。
- ¹⁹ 中村隆英2015年197頁。
- ²⁰ 中村隆英2015年198,200頁。
- ²¹ 3月14日の状況は、猪飼隆明2008年134頁参照。「田原坂の戦い」の状況は、同書131～135頁が詳しい。
- ²² この逸話は、注29の児玉淳氏の話より。
- ²³ 熊本以降の展開は、中村隆英2015年201頁。
- ²⁴ 『川内市史』下巻172頁。
- ²⁵ 原口泉は、非西郷派の共通した特徴は、地方の門閥有力者、地主、豪農、篤農家、産業開発者

- であるとしている〔原口泉2015年46頁〕。
- ²⁶ 加治木郷士でのちに警視總監、熊本県知事になった川上親晴の回顧によると、当時、軍事教練主体の教育に疑問を持ち私学校を退校しようとしたが、認められない者があったという。また退校しても村八部になったという〔落合弘樹2013年124頁〕。
- ²⁷ 佐々木克1991年6,7頁、徳永孝一2003年73頁。西郷軍・政府軍全体の兵力と戦死者は、原口泉他2015年7頁参照。
- ²⁸ なお、宮崎県は西郷軍敗走の地となり人的物的に大きな被害を受けた。筆者の「宮崎の地で敗走する前に西郷さんは降伏していたらよかった」という質問に対し、原口泉氏は「宮崎は豊かな所なのでここでしっかり態勢を立て直そうと思ったのではないか。桐野にまかせるしかない、宮崎で立て直す。そして、西郷さんは自ら死（自決）を選ばない（自分で降伏とは言えない）」という趣旨の回答があった〔平成29年度宮崎市文化講座「西郷どんの生涯」2017年10月7日宮崎公立大学講堂において〕。
- ²⁹ 有馬晋介の功績は、「明治二十五年以降村長の要職にあること前後七年、大度にして瑣事に拘泥せず、農事の改良及造林を志し遂に県下優秀の森林をなし今日まで村の財源として偉大なる功績を残し村民は今に名村長として敬仰して居る」〔『高江村誌』65頁〕とされる。また、晋介次男・純彦の長男・有馬弘毅（医師：京都府医師会会長を歴任）によると、「祖父は明治10年鹿児島島の血気旺んな青壮年の大半が参加した西南の役に17才で参加し顔に銃弾をうけてほぼがつった顔になっていました。私は病床に意識を失って寝ていた姿しか知りませんが（中風で長く寝たきりであったという：筆者）、父は、この祖父を学識があればもっと世に出ることができた立派な素材だったと非常に敬慕していたそうです。村長を長く続け植林農地改良に精出していたと云う」〔『有馬純彦のおもかげ』58頁：発行年不詳〕。晋介の次男・純彦の経歴・業績については、『川内市史』下巻1980年1023頁。晋介の長女・「いま」については、嫁いだ児玉家の児玉格氏、児玉淳氏へ聞き取り（2017年11月）を行った。
- ³⁰ 原口泉他2015年204,206頁。

参考文献

猪飼隆明『西南戦争—戦争の大義と動員される民衆』吉川弘文館、2008年。

大島美津子『明治のむら』教育社、1977年。

落合弘樹『西南戦争と西郷隆盛』吉川弘文館、2013年。

佐々木克「西南戦争における西郷隆盛と士族」京都大学文学部『人文學報』1991年3月号。

徳永孝一『官の成立・民の変貌—宮崎の歴史・明治時代前期』鉾脈社、2003年。

永井哲雄「西南の役と日向の動向—西郷軍と宮崎支庁の役割—」宮崎県立図書館編『宮崎県地方史研究紀要』第4号、1977年。

西南戦争における郷土従軍の背景に関する考察（有馬晋作）

中村明蔵『薩摩民衆支配の構造』南方新社、2000年。

中村隆英『明治・大正史 I』東京大学出版会、2015年。

橋本行史編『現代地方自治論』ミネルヴァ書房、2010年。

原口泉・永山修一・日隈正守・松尾千蔵・皆村武一『鹿児島県の歴史』山川出版社、1999年。

原口泉・宮下満郎・向山勝貞『鹿児島県の近現代』山川出版社、2015年。

藤井徳行・小原健「薩摩藩出水郷土の研究—西南戦争を中心として—」兵庫教育大学『研究紀要』1993年1月。

南日本新聞社編『鹿児島百年（中）明治編』春苑堂書店、1968年。

芳即正編『鹿児島県民の百年』著作社、1987年。

資料

川内郷土史料編さん委員会編『川内市史料集9・川内と西南之役』1977年（「明治十年・出軍日記・有馬晋介」は1～12頁所収）。

川内郷土史料編さん委員会編『川内市史・下巻』1980年。

高江村教育委員会編『高江村誌』1953年。

矢野宏治「白石邦彦氏の聞き語り」西郷南洲顕彰会『敬天愛人』第29号、2011年。

